秋と漫歩

萩原朔太郎

四季を通じて、私は秋という季節が一番好きである。もっともこれは、たいていの人に共通の好みであろう。元来日本という国は、気候的にあまり住みよい国ではない。夏は湿気が多く、蒸暑いことで世界無比といわれているし、春は空が低く憂鬱であり、冬は紙の家の設備に対して、寒さがすこしひどすぎる。(しかもその紙の家でなければ、夏の暑さがしのげないのだ。)日本の気候では、ただ秋だけが快適であり、よく人間の生活環境に適している。

だが私が秋を好むのは、こうした一般的の理由以外に、特殊な個人的の意味もあるのだ。というのは、秋

が戸外の散歩に適しているからである。元来、私は甚(はなは)だ趣味や道楽のない人間である。釣魚(つり)とか、ゴルフとか、美術品の蒐集(しゅうしゅう)などという趣味娯楽は、私の全く知らないところである。碁、将棋の類は好きであるが、友人との交際がない私は、めったに手合せする相手がないので、結局それもしないじまいでいる次第だ。旅行ということも、私は殆(ほとん)どしたことがない。嫌(きら)いというわけではないが、荷造りや旅費の計算が面倒であり、それに宿屋に泊ることが厭(いや)だからだ。こうした私の性癖を知ってる人は、私が毎日家の中で、為(な)すこともない退屈の時間を殺すために、雑誌でもよん

でごろごろしているのだろうと想像している。しかるに実際は大ちがいで、私は書き物をする時の外、殆ど半日も家の中にいたことがない。どうするかといえば、野良犬(のらいぬ)みたいに終日戸外をほッつき廻っているのである。そしてこれが、私の唯一の「娯楽」でもあり、「消閑法」でもあるのである。つまり私が秋の季節を好むのは、戸外生活をするルンペンたちが、それを好むのと同じ理由によるのである。

　前に私は「散歩」という字を使っているが、私の場合のは少しこの言葉に適合しない。いわんや近頃流行のハイキングなんかという、颯爽(さっそう)たる風情(ふぜい)の歩き様を

するのではない。多くの場合、私は行く先の目的もなく方角もなく、失神者のようにうろうろと歩き廻っているのである。そこで「漫歩」という語がいちばん適切しているのだけれども、私の場合は瞑想（めいそう）に耽（ふけ）り続けているのであるから、かりに言葉があったら「瞑歩」という字を使いたいと思うのである。

私はどんな所でも歩き廻る。だがたいていの場合は、市中の賑（にぎ）やかな雑沓（ざっとう）の中を歩いている。少し歩き疲れた時は、どこでもベンチを探して腰をかける。この目的には、公園と停車場とがいちばん好い。特に停車場の待合室は好い。単に休息するばかりでなく、そこに

旅客や群集を見ていることが楽しみなのだ。時として私は、単にその楽しみだけで停車場へ行き、三時間もぼんやり坐っていることがある。それが自分の家では、一時間も退屈でいることが出来ないのだ。ポオの或る小説の中に、終日群集の中を歩き廻ることのほか、心の落着きを得られない不幸な男の話が出ているが、私にはその心理がよく解るように思われる。私の故郷の町にいた竹という乞食（こじき）は、実家が相当な暮しをしている農家の一人息子（ひとりむすこ）でありながら、家を飛び出して乞食をしている。巡査が捕えて田舎（いなか）の家に送り帰すと、すぐまた逃げて町へ帰り、終日賑やかな往来を歩いてい

るのである。

秋の日の晴れ渡った空を見ると、私の心に不思議なノスタルジアが起って来る。何処(どこ)とも知れず、見知らぬ町へ旅をしてみたくなるのである。しかし前にいう通り、私は汽車の時間表を調べたり、荷物を造ったりすることが出来ないので、いつも旅への誘いが、心のイメージの中で消えてしまう。だが時としては、そうした面倒のない手軽の旅に出かけて行く。即ち東京地図を懐中にして、本所(ほんじょ)深川の知らない町や、浅草、麻布(あざぶ)、赤坂などの隠れた裏町を探して歩く。特に武蔵野(むさしの)の平野を縦横に貫通している、様々な私設線の電車に乗っ

て、沿線の新開町を見に行くのが、不思議に物珍らしく楽しみである。碑文谷（ひもんや）、武蔵小山（こやま）、戸越（とごし）銀座など、見たことも聞いたこともない名前の町が、広漠たる野原の真中に実在して、夢に見る竜宮城のように雑沓している。開店広告の赤い旗が、店々の前にひるがえり、チンドン楽隊の鳴らす響が、秋空に高く聴（きこ）えているのである。

家を好まない私。戸外の漫歩生活ばかりをする私は、生れつき浮浪人のルンペン性があるのか知れない。しかし実際は、一人で自由にいることを愛するところの、私の孤独癖がさせるのである。なぜなら人は、戸外に

いる時だけが実際に自由であるから。

底本：「猫町　他十七篇」岩波書店、岩波文庫
１９９５（平成）年５月16日第１刷発行
底本の親本：「萩原朔太郎全集」筑摩書房
１９７６（昭和51）年
入力：大野晋
校正：鈴木厚司
ファイル作成：鈴木厚司
２００１年10月11日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。